

1. 町田市名誉市民章としてのメダル。表彰式には最愛の妻・和子さんと長女の葉子さん、長男の俊太郎さんと出席し、記念演奏ではサプライズでタクトを振った 2. 横浜みなとみらい大ホールの1ショット(2017年8月) 3. 世界の名ホールを巡るツアーの第一弾、ウィーン楽友協会大ホールでベートーヴェンの第九を演奏(2004年12月) 4. 思い出の詰まった楽譜やタクト 5. 名誉市民の表彰式で石坂市長(右)、若林市議会議長(左)とともに



荒谷俊治(あらたにしゅんじ) 1930年東広島市生まれ。福岡県中学修猷館から旧制福岡高等学校へ進学。バレエ部に所属し、旧制高校最後の全国制覇を果たす。九州大学法学部・文学部卒。町田フィルハーモニー交響楽団では1975年以来音楽監督・常任指揮者を務め、現在は桂冠指揮者 30年以上にわたる音楽・文化の発展に寄与した功績で2002年



指揮を石丸寛氏、作曲を高田三郎氏に師事し1959年東京放送合唱団指揮者デビュー。1968年～1974年東京フィルハーモニー交響楽団指揮者 1974～1980年名古屋フィルハーモニー交響楽団常任指揮者 東京都文化功労者表彰 2003年～2012年日本指揮者協会会長 2004年地域文化功労者文部科学大臣表彰 2018年町田市名誉市民

圧倒的な人間力と 薫り高い音を紡ぎ出す情熱と。

2018年春、4人目の町田市名誉市民が選ばれた。荒谷俊治氏は指揮者として60年のキャリアを持ち、その活動は国内外での演奏にとどまらずアマチュアの育成や芸術の普及など多岐にわたっている。日本指揮者協会の会長まで務めた人徳者でカラヤンならぬ『アラヤン』の愛称で、多くの人から慕われ、そして愛されている。

特集 3

指揮者・町田市名誉市民 荒谷俊治

荒谷俊治氏が音楽家としての第一歩を歩み始めたのは九州大学の学生の時だった。法学部で弁護士を目指していた彼は、九大フィルハーモニー・オーケストラと福岡合唱協会の一員で、そこで生涯の師となる石丸寛氏に出会う。指揮の手ほどきも石丸氏から受けた。法学部を卒業した後、音楽を続けるために文学部に再入学する。卒業後は上京した石丸氏のあとを追って荒谷氏も上京した。

東京での生活は苦しく、NHKの『みんなの歌』や『うたのメリー・ゴールラウンド』で編曲や指揮をして生計を立てた。そんな生活を送りながら2〜3年が過ぎた29歳の秋、東京放送合唱団の指揮者として待望のデビューを果たす。その後38歳で東京フィルハーモニー交響楽団の指揮者となり、その翌年には文化庁の派遣でアメリカへ留学、もう一人の師と仰ぐ、ジョージ・セルに指導を受ける。彼の計らいでクリウランド管弦楽団を指揮する好機にも恵まれた。

指揮者としてのキャリアを積み上げる一方で、荒谷氏はアマチュアの育成にも取り組んだ。1972年に南つくし野に引っ越してくると、噂を聞きつけた町田の音楽愛好家たちが彼のもとを訪れ、町田

フィル*の設立協力と指導を嘆願した。以来、惜しめない愛情を注いだ町田フィルは桂冠指揮者となった今でもホームのような大切な場所となっている。2001年に設立した町田市芸術協会では芸術活動の普及に懸命に取り組み、解散するまでの12年間、異なる文化を持つオーケストラやバレエ、合唱、オペラをまとめ、総合芸術の舞台をいくつも演出した。荒谷氏の魅力はその音楽性にとどまらず、人を惹きつける人間力にもある。リーダーシップとおおらかな人間性。全国の音楽家から愛され、慕われる人徳こそが、音楽の中に映し出され、音となり響き渡っているのかもしれない。

「フレームスとドヴォルザークが好きですね。心に残った演奏は…たくさんあります。選べないな。どの演奏にも思い出があります。作曲家や作詞家の想い、作品のテーマ、それらを全て受け止めて見出した自分のテーマで、音楽を創っています。音には色も薫りも厚みもある。皆の気持ちが一つになった時の音は素晴らしいですよ。」
信じた音に近づけるため、全身全霊でタクトを振り続ける88歳。名誉市民となった今も、その情熱が潰えることはない。